



ロボットとオノマトペ

ウィル・スミス主演の I,ROBOT という映画があったが、これからの世の中、ロボットが我々の生活の中に入ってくるだろう。こんな記事があった（12日、朝日新聞）。

■文系の人もぜひ挑戦を

玉川大学工学部・岡田浩之教授

ロボットを研究したいけど、私は向いていない」と言う人がいます。私は、ロボットが出てくるSF小説を読んで興味を持ちました。どんな人にも、ロボットとの接点があります。

ロボットの研究は、ハードウェア、ソフトウェア、デザインなど幅が広い。人工知能をつくるには、文章を書くのが得意な人のほうが向いているかもしれません。理系・文系を問わず、誰でも目指すことができる分野です。

そのためには、多くの本を読んだり、失敗の経験をしたりしておくことが大事です。実現不可能だと思っていたことが突然できるようになる。やりがいのある分野ですよ。

*

ロボットだし、工学部だし、理系の世界だろうなあと考えていたら、人間の生活に結びつくロボットを開発しようとする、そんな単純な発想ではダメらしい。

そもそもこの記事は進路を考えるコーナーのレポートで、少子高齢化が進む中、家での生活をサポートするロボットの開発が求められている現状を踏まえながら、それが学べる大学を紹介するものである（電通大、大阪大、立命館大、豊橋科技大など）。

さて、開発の中で期待されていることの一つが「簡単なコミュニケーションで動かせる」ということで、次のような一節もあった。

*

岡田教授はロボットを使って人間の知能を解明する「認知発達ロボティクス」の研究で知られる。同大の脳科学研究所「赤ちゃんラボ」で赤ちゃんの発達を研究し、玩具開発などに生かしてきた。

いま、力を入れているのは、「ワンワン」や「のしのし」など「オノマトペ」（擬音語や擬態語）の研究だ。これまでの研究で、「ザラザラ」などの感触を表す言葉は、日本語が母語でない外国の赤ちゃんでも認識することが分かった。

「オノマトペは、世界共通の言語になりうるかもしれない。将来、オノマトペで指示を出す技術を開発できれば、赤ちゃんの見守りなど家庭で使うロボットに応用できる」と岡田教授。

現在は、日本語なら日本語、英語なら英語を認識するようにプログラミングし、文法も正しくなければならぬ。もし、ロボットがオノマトペを理解できるようになれば、どこの国の赤ちゃんでも動かせるかもしれない。さらに、使う人の生活習慣や感情までもよめれば――。「あっちから、ふわふわのものを取ってきて」が通じるロボットの出現も近いかもしれない。

*

日本語のオノマトペを、日本語を母語としない赤ちゃんも認識するというのは面白い。こういう記事を読むと、色々な面から研究が進んでいるんだなあとと思う。そして、そのためには、文・理関係なく、幅広く学ぶことが大切なのだということもよく分かる。